

# 中国語の品詞の考え方

相原 茂

## 【0】

よく研究と教育の合体という。ということは、この二つはつながっているようであり、また対立するようでもあるからだろう。教育に研究の成果を反映させなければならない、研究成果を現場に活かしてこそ教育の実もあがる、というのが正論だ。

しかし、学術研究のレベルが一定程度の高さになれば、その内容を教育に反映させるのは難しくなる。中国語学でも、いま話題になっているテーマを初級や中級の教室で披露するのはお門違いだろう。だが、中国語学のホットなテーマが、まれに教育と深く関わることもある。それが「品詞問題」である。

周知のごとく、中国語の辞書にはつい数年前まで品詞表示がなかった。単語の品詞は文脈によりコロコロ変わる、ぐらいの認識であった。それが近年、多くの中国出版の現代語辞書が品詞表示を試みるようになった。そしてついにといべきか、現代中国語の権威的辞書『現代漢語詞典』（商務印書館）がその第5版から品詞を表示したのである。

辞書は学習者も入門期に使うもの。日本の中国語辞書にはすでに品詞表示がある。それがところどころ、中国の辞書とは異なっている。早い話、名詞かと思っていた語が中国の辞書では動詞と表示されているではないか。これは気になる。“考試”は「試験をする」の他に「(期末) 試験」とか「テスト」という名詞の語義項目もあると考えていると、これがない。「クーデター」は中国語で“政変”と言う。だが、この語は動詞だ。名詞としてはない。どう考えるべきか。教壇に立つもの、これらについての最低の認識がいるだろう。

## 【1】

日本語は名詞の形で動詞、形容詞を含意すると言えないか。例えば新聞のスポーツ欄に、高校野球の見出しが出ていたとする。

「東東京 屈強4校決定！」

文末の「決定」に注目する。意味的には動詞だろう。しかし、形のうえからは名詞だ。

「高校生10名、中国へ留学」などという記事でも、われわれは最後の「留学」を、「留学する」あるいは「留学した」と理解している。これはいわば、「留学」という名詞が述語になっている例だ。もっと言えば日本語ではある文体において「名詞が述語になれる」ということだ。「米副大統領、今夕日本到着」、「首相今秋中国訪問」などなど、同類だ。

「首相今秋中国訪問」など、漢字ばかりでまるで漢文みたいだ。つまり中国語みたいだ。ただ、中国語はVO構造だから、動詞-目的語の順になる。すると、

首相 今秋 訪問 中国。

これで中国語として、まず通じる。ところで上の文で、「訪問」はあとに目的語「中国」をとり完全に動詞である。辞書にも動詞とでている。

見ただ目から言えば同じような形だが、日本語と中国語ではこうなる。

<日本語> 訪問 [名詞]

<中国語> 訪問 [動詞]

日本語では「訪問」は名詞だが、「スル」をつけるとすぐに動詞になる。またそんなことをしなくても新聞の見出しなどの特定の文体においては動詞として解釈されている。つまり「名詞が動詞を含意する」。

中国語では「訪問」は動詞だが、このままの形で名詞のようにもなる。たとえば「彼の訪問は大きな働きをした」というような文は中国語にすれば、

他的访问起了很大的作用。

とすることができる。ここで「彼の訪問」は“他的访问”となる。動詞“访问”がここでは連体修飾語“他的”の修飾を受けている。つまり中国語では「動詞が名詞を含意する」と言えそうだ。さきほどの図に補っておこう。

<日本語> 訪問 [名詞] (動詞を含意する)

<中国語> 訪問 [動詞] (名詞を含意する)

もちろん、日本語は「旅行、到着、留学、逮捕」などあとに「スル」を加えて動詞とすることができる。いずれも漢字2文字以上での話だ。

## 【2】

中国語では、「漢字2文字」などという制限はない。つまり、一般則として「中国語は動詞、形容詞が名詞を含意する」と言うことができる。もちろん、

より正確には、次のように記述される。

「中国語の動詞や形容詞は、典型的には名詞が充当するような文成分になれる。つまり中国語の動詞や形容詞は主語になることができ、目的語になることができ、連体修飾語の修飾を受けることもできる」

これは中国語学では常識に属することだが、特にこのことを教室の授業で披露することはなかった。たとえば、「研究、回答、学習、結婚」という語があると、中国語ではこれは第一義的には動詞である。日本語では名詞と見なされる。日本語でどういう品詞になるかは、もちろん、中国語の知ったことではない。中国語の文法は中国語の論理で構成される。ところが、次のような例文における、「回答、結婚、回忆、革命」なども動詞と考えるのである。

他给了我一个满意的回答。

亲近结婚与遗传病

结婚是人生中的一件大事。

她留下了美好的回忆。

目前我们正面临新的技术革命和产业革命的挑战。

訳読などにおいては、わざわざそういうことを指摘しない。「日本語では、ここは名詞になりますが、中国語の品詞としては動詞です」などとは言わない。しかし、中国の辞書にも記述されるとなると、いままでのように「触れない」では済まされない事態になるやもしれぬ。たとえば“合唱、构思、构图、估计、呼吁、激战”などもその品詞は動詞のみである。

### [3]

このような現象は中国でもこれまで「名物化」などと呼ばれてきた。さらに一般の中国人の教師でも、これらを名詞であると思っている人が少なくない。どうしても常識的な感覚と語学界が獲得したシンプルな原理「一品詞多機能」という考え方とは乖離がある。

ともあれ、私はこれを「コト化」と呼んでいる。つまり、「結婚、研究、調査」などは「コト化」しても、品詞としては「名詞」をつけない。動詞のままである。そもそも中国語では動詞がそのまま主語になれる、つまり「食べるコトが大好きです」のように、日本語では形式名詞「コト」や「ノ」が要るところ、中国語では要らない。コト化しても形態は何も変わらないわけである。

しかし、「コト化」ではなく、「モノ化」した場合は名詞になる。「モノ」であるから具体的に持ったり、触ったり、指差したりできるモノと化すのである。

報告 [動] 報告する→ [名] レポート  
急電 [動] 緊急に電報を打つ→ [名] 緊急の電報  
寄语 [動] 言い伝える→ [動] 寄せられた言葉  
留言 [動] 伝言する→ [名] 伝言  
剪影 [動] 切り紙細工を作る→ [名] 切り紙細工の作品  
拷貝 [動] コピーする→ [名] コピーしたもの

動作とそれによって生み出されたモノ、という関係にある場合が多い。具体的なモノとしてあるわけで、これらは分かりやすいだろう。

“克隆”などは「[動] クローン技術で無性生殖個体を作り出す」と言う意味で動詞しかない。その結果生み出された個体はあくまで“克隆羊”であり、“克隆”自体がモノ化することはない。なお、参考までに、このような科学技術や医学などの専門用語は、われわれが名詞扱いにしていたものが、実は動詞というものが多い。

#### [4]

「ヒト化」したのもも名詞になる。これは元のものが形容詞と動詞がある。形容詞のものから例を挙げよう。たとえば「猴儿精」は「ずる賢い」という意味だが、これはまた「ずる賢い人」をも表せる。このとき、当然名詞である。

奸佞 [形] 悪賢い→ [名] 悪賢い人

巨富 [形] 大金持ちである→ [名] 富豪、大金持ち

動詞に由来するものは多い。例えば“导演”は「劇を演出する、映画を監督する」ことだが、これがそのまま「演出家、監督」という人を表す意味になる。このときは名詞になる。

编辑 [動] 編集する→ [名] 編集者

导游 [動] 案内する、ガイドする→ [名] 案内、ガイド

裁判 [動] 審判する→ [名] レフェリー、審判

教练 [動] コーチする→ [名] コーチ

逗哏 [動] 漫才で面白い事を言って笑わせる→ [名] 漫才のツッコミ役

罗锅 [動] 腰を曲げる→ [名] 腰が曲がっている人

驼背 [動] 背中を丸める→ [名] 猫背の人

小广播 [動] こっそり噂を広める→ [名] 噂を広める人、放送局

保安 [動] 安全を守る→ [名] 保安員

管事 [動] 業務を司る→ [名] 業務管理者、執事

これらの「ヒト化」「モノ化」に比べると、「トコロ化」の例は少ない。ここでは1例のみ挙げておく。

背阴 [動] 日が当たらない→ [名] 日陰の場所

## 【5】

“挿話”はふつうは動詞で「人が話している時に口をさしはさむ」ことだ。これがさらに「エピソード」となれば完全に名詞扱いだ。この動詞と名詞の間に、きわめて微妙な「口を挟む」その「挟んだ話」がある。これはモノ化というべきか、指示可能性とでもいうか。「彼のその口を挟んだ話を聞かせてくれ」というような場合だ。具体的に触ったり、つかんだりできないが、一種の「作品化」と見なすことができるだろう。モノ化とは言えなくとも、コト化からはより一步具体的な形をもち、言語作品という側面がある。例えば次のようなものである。

密報 [動] こっそり報告する→ [名] 密告

密約 [動] ひそかに約束を交わす→ [名] 密約

密令 [動] ひそかに命令する→ [名] 密令

密告 [動] 密告する→ [名] 密告

この観点をさらに発展させれば、次のような語群も視野に入ってくる。

摘要 [動] 要点を書き出す→ [名] 摘要

注解 [動] 語句に注釈をする→ [名] 注釈 (の文字)

注释 [動] 同上→ [名] 同上。

但し、『現代漢語詞典 第5版』では、以下の語彙については動詞を認めるのみで、名詞語義を記載していない。

浅说 摘抄 摘记 摘录 笔记 集注

これはやや統一を欠く処理と思われ、筆者はこれらが書名や文書などの作品名に用いられる場合を考慮し名詞とすべきと考える。

## 【6】

「どのぐらいの大きさか」とか「どのぐらいの高さか」と日本語で言う。これにあたる中国語は“你的孩子现在多大了?”とか“有多高?”のようになる。これらの“大”“高”といった語の品詞だが、『現代漢語詞典 第5版』では驚くべき事に「名詞」としている。この他にも、

这条鱼有几斤重?

这条河有一里宽。

这里的河水只有三尺深。

といった、「深さ、重さ、幅」などを表す、単音節形容詞の積極的なペアのほうの中性的用法に限られるようであるが、いずれも名詞扱いである。しかし、いずれの用例中でも“有多\_\_?”と置き換えることができ、問題の語は“多”の後に生起している。これまでの本稿の議論からも、これらは形容詞のままにすべきと思われる。

## [7]

日中で品詞認定で大きなズレを生じるものに、単語とするか形態素とするか、言い換えれば「語としての独立運用」を認めるか否かという問題がある。freeかboundかという問題で、これにはいくつかのケースがあるが、いずれもこれまでの議論とは違い「親字」に関わることである。ここでは二つだけとりあげる。一つは、語末によく来る字、一つは書面語あるいは文語文体に使われる字である。

語末によく現れるものは、概ね次のようなもので、造語要素としては常用のものだ。

一室、一所、一局、一课、一科

特に組織の部署名などに使われる。これまで日本の辞書ではこれらをboundに属すものとし形態素扱いが多かったが、『現代漢語詞典 第5版』ではこれらを単語と認定している。確かに造語要素としてよく使われ、他の要素と結合した結果がまた「一単語」と見なせることから、日本では単語と見なさなかったが、実際は、“局里有四个课”や“你要挂什么科”などとよく使うことから、単語扱いとすべきであろう。これらが形態素と見なされてきた背景には用例がほとんど常に「派出所、研究所、招待所」といった熟語ばかりが挙げられていたという要因であろう。

## [8]

メモ用語とでも呼ぶべき文体がある。本格的な文語ではない。しかし、話し言葉とは違う。ちょっとメモしたり、人への書き置きに使うような簡潔なもので、日記の文体などとも通じる。「午後外出、帰宅するや、N君来訪。しばし雑談。」「例の件、要確認」などである。

例えば副会長ポストに欠員があったとする、すると“副会长 暂无”などと

書く。こういう場合の“暫”は副詞として単語と認めるか。中国人のある程度の教養のある人なら、このぐらいの「メモ用語」は使いこなせる文体だ。従って、ここに出てくる「語」を中国の辞書が品詞扱いすることに私は理解を示す。しかし、日本出版の「現代中国語」を扱う辞書としては、さすがにためらいが残る。以下のような例である。

尚待研究（なお考慮を要する）

頃接来信（この間お手紙を受け取りました）

亟須处理（早急に処理されたし）

恰如其分（適切に分をわかまえている）

上海刘斌（上海劉より）

このような日常生活の場面で使われそうな表現と、そこに含まれている語群は当然のことながら文言文の中でも頻繁に使用されるものであり、これらと文言文における語彙との線引きは不可能である。

もし、これらに副詞とか動詞、形容詞といった品詞を与えれば、中国の膨大な文言文や書面語に出てくる常用語についても単語扱いを余儀なくされる。“若无其事”の“若”や、“此书之印行盖在1902年”の“盖”、“苟无民，何以有君”における“苟”などである。

『現代漢語詞典 第5版』はこれらをいずれも単語とし、品詞名を付しているが、筆者はこれらは形態素扱いとすべきという立場をとる。少なくとも、日本の現代中国語の学習者にとって、一般的な単語とこれらの一線を画すことはどう考えても必要と思われる。

（中国語コミュニケーション協会）